

や「自負」も、あわせて眺められる場を編集する必要があった。その場所は音も匂いも肌触りもある「雰囲気」が漂っていないなければならない。「韓国の元従軍慰安婦の人が話すディテールの積み重ねにこそリアリティがあり、大きな歴史の流れに抵抗する」。と作家辺見庸は河合塾福岡校の講演会で話した。私はまったく同感する。過去の事実を記録する、編集するときも「肉体に刻まれたことば」や「雰囲気あるもの」が重要である。それは「ものがたり」が在るということであり、また、その「ものがたり」は伝わり再生することだと思ふからだ。

ユニークな歴史叙述の作品

西川 祐子

「事件」とは何か。一般に話題、問題となるような出来事、さらには訴訟事件となった出来事を指す。事件はただちに論評され、裁定をくだされ、分類され、ときには年表に載る。事件はそれで終わるのだろうか。事件をひきおこした当人も、巻き込まれた人間も、その瞬間、事件の意味をわかっていない。事件から生き残った残り時間をかけても、事件の意味はわからない。わからないから生きて自問をにつづけ、次世代に問いを残す。

『農村青年社事件・資料集』は、一五年戦争前夜、農村にアナキズムにもとづく自治共同体をつくるべく働き、一九三二年には運動の資金獲得をめざした窃盗の罪で、一九三六年には一転して治安維持法違反の罪で起訴され、二度の裁判、二度の刑の執行をうけた事件の当事者たちが編んだ資料集である。それぞれの戦後を生きたのち資料集編纂にとりかかったとき、かつての青年たちは七〇歳、八〇歳の年齢となっていた。それから一六年、資料集全三巻が完成した今、農村青年社運動史刊行会代表の星野準二は九〇歳である。

三巻すべて、資料集と称し、そこに編集の主張がこめられている。資料集Ⅰ、星野が執筆した運動史もまた、解釈や釈明を極力さげ、立場を逆にする証人の記憶をつきあわせ、日録の午前か午後かという細部の正確にこだわる。作業時間は資料の収集よりも、記述のそぎおとし、禁欲に多く費やされている。

資料集Ⅱには農村青年社の発行物、関係出版物、通信、膨大な警察調書の一部、裁判記録がおさまられている。活版印刷、ガリ判、手書きの字、行間の書き込み、新聞の写真が復刻されてなまなまし

い。何十年のあいだ信州の農民たちに保存されていた新聞、通信、若い協力者たちが資料室や図書館から捜し出した記録など、資料には資料の経歴がある。

資料集Ⅲには、農村青年社の運動と事件にたいする同時代と後世の人々の論評を集めている。資料集の完成をまたずに亡くなった同志の談話記録、若い研究者の評価や批判がおさめられているかとおもえば、事件を取り調べた特高課警部が戦後に書いた手記というおどろくべき資料もある。読者には敗戦後に特高がいだく恐怖、資金提供を断りながら共感を印象つけた島崎藤村の老獪、彼らの好意を好意としてうけとる記録者の老いてかわらぬ純情を危惧したり批判的に読む自由が与えられている。読者の責任において創造的な解説をすることのできる資料集、いな、それ自体がユニークな歴史叙述の作品である。

例をみない豊富な資料

小松 隆 二

世界恐慌の渦巻く一九三〇年代前半に活動した農村青年社は、どこにでもあるありふれた村、それも零落する田舎の村を足場に、そこを抜け出すことのできない貧しい農民たちを巻き込んだ自主自治のコミュニケーション建設運動であった。

この団体の活動の広がりや深さは、アナキズム系の運動事例としてみても、困窮する地方農村の運動事例としてみても、また本格的に戦時体制に突き進む直前の時代の運動事例としてみても、他にその例をみない特異なものである。その点で、現在もお強い興味を引かれる団体であり、活動である。

その背後に、あるいは指導的位置には、たしかにアナキズム系の運動家があったが、観念・理念に走りがちな当時の彼らがそれを超えて普通の村の、普通の農民と連帯したことは歴史に残る試みといっ

てよい。農民たちの方は、足下の村の実態をふまえた村造りに自ら参加し、主役となることで、日常の安楽も将来の希望もなかった村の生活に、現実性は弱かったにしろ、初めて主体性とかすかな希望を抱けるまでになったのである。それだけに、最後は取締当局もこの運動に危険な芽を読み取り、見逃すことをしなかった。

その農青社の結成から「事件」に至る資料・記録集が三巻からなる『農村青年社事件・資料集』である。事件の当事者であり、またこの資料集の編集責任者の一人でもある星野準二さんから、この企画を初めて耳にしたのは、もう二〇年近くも前のことになるが、実際の資料収集活動は、それよりもはるかに長い年月をかけて行われた。その集大成として一九九一―一九九四年にかけて貴重な果実に結実したのである。

その長い年月を、相京範昭さんのような若い協力者を除けば、農青社に関係した人たちが自身が丹念に収集・編集活動を行ったことが、本書の第一の特徴である。それは形や外見のスマートさよりも内容の豊かさによく反映されている。

もう一つ総合的・立体的な構成になっていることも本書の特徴として印象づけられる。まず資料に基づいて歴史が語られ、ついで数え切れないほど多く刊行された機関紙誌や資料の全貌が解明、紹介される。さらに取調べ・裁判、官庁、新聞社関係の諸資料、研究的論文などが収録され、あわせて全体を飾るように多くの写真が紹介されるが、それらは記録性の意義を大いに高めてくれる（私自身、写真を通して宮崎晃さんはじめ、お世話になった何人かの人を懐かしく思い出している）。それらが地域的にも、拠点であった信州、それに大阪、東京、名古屋などを結ぶ関係で明らかにされるので、農青社の活動の実態が総合的、立体的に理解できる構成になっているのである。

戦前の思想事件でこれほど豊富に資料が収集された例はそうないが、この『資料集』が広く関心を呼ぶこと、そしてこれが呼び水となり、これまで確認できていない一部関係者の足跡や裁判記録、あるいは関係農村の生まの資料類の新たな発見につながることを願って止まない。